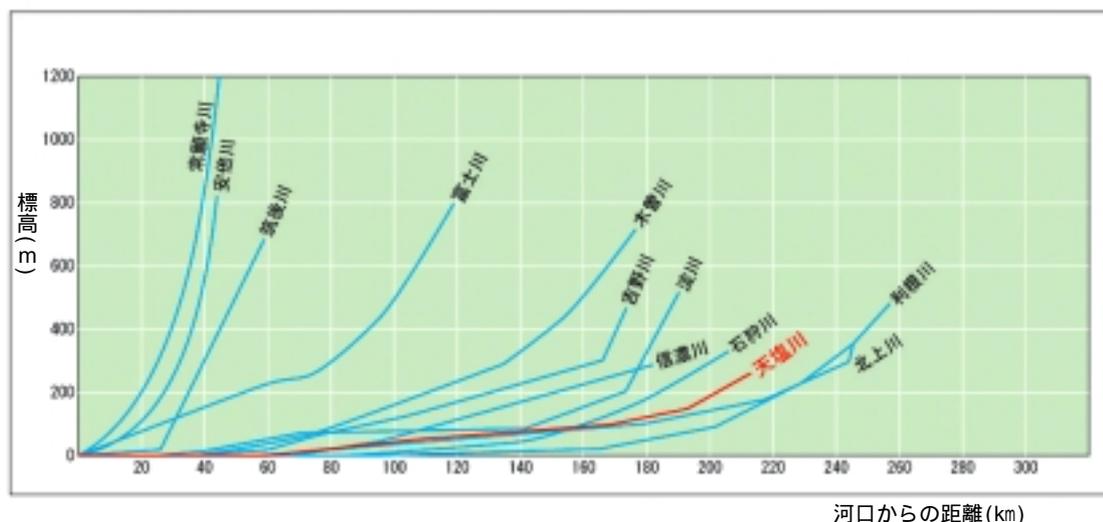


8. 河道特性

天塩川は、上川支庁と網走支庁の境をなす高山植物の群生地として知られている天塩岳(1,558m)に源を発し、途中剣淵川、名寄川、問寒別川など数多くの支流を合わせながら北海道北端で日本海に注ぐ流域面積 5,590km²、幹川流路延長 256km の一級河川である。

その流域は、3市10町1村を有し、山地 73.3%、平地 26.7%で構成されており、細長い流域形状を呈している。

天塩川の河床勾配は北上川とほぼ同じ程度で、本邦では緩勾配河川に属している。



上流部(天塩岳～名寄川合流点)

上流部の天塩川は豊かな亜寒帯森林地帯を急勾配で安山岩質の峡谷を西に流下して岩尾内ダム地点に至る。その後、粘板岩が卓越した区間を流下し、土別付近の扇状地を通過して大規模稲作の北限である名寄盆地に入る河床高 100m 以上、河床勾配 1/700 以上の急流河川である。

盆地周囲には砂礫質の台地や河岸段丘が発達し、河畔林が連続した自然河岸区間が多い。河床が砂礫で構成され、復列砂州が見られるが、河道は比較的安定しており、近年では砂州上に樹木の発達が多く見られる。



上流部の状況

出典：旭川開発建設部

中流部(名寄川合流点～問寒別川合流点)

中流部は名寄盆地の下流で智東の狭窄部を通過して美深低地に入り、1/1500 程度の緩やかな河床勾配となる。その後、音威子府の狭窄部で北見山地を通過して中川低地に入る河床高標高約 5 ~ 100m の区間である。この区間は良好な落葉広葉樹林帯が広がり、流れが早瀬である自然豊かな狭窄部とそれに挟まれている大小の扇状地から成り、扇状地上では大きな蛇行を繰り返しており、側岸侵食の激しい箇所が多数存在する。

河岸土質は主にシルトであり、河床材料は砂礫であるが、所々に築のような形で横断している岩(テッシ)が露出している。このため、天塩川は全体的に河床低下傾向にあるが、智東の狭窄部から音威子府の区間においては河床低下がほとんど無い状態である。



中流部の状況

出典：旭川開発建設部

下流部(問寒別川合流点～河口)

下流部の天塩川は大きく蛇行しながら泥炭地が広く分布する氾濫平野を西流し、豊かな湿原植生が分布するサロベツ湿原を貫流するサロベツ川を合わせた後、河岸段丘で大きく偏流して砂丘沿いに約 10km 南下し日本海に注いでいる。

河床勾配は、河口より海岸沿いの 10km まではほぼ水平、それより上流が 1/5,000 ~ 1/3,000 と緩勾配であり、河口から 20km 区間は感潮区間である。

このため河床材料はシルトや細砂が多くを占め、全体的に河床は堆積傾向にある。

著しい蛇行区間は多数の捷水路工事により直線化され、大小の旧川跡地(沼)が点在している。また、砂州変動の激しかった河口部では導流堤により、現在安定している。



下流部の状況

出典：旭川開発建設部

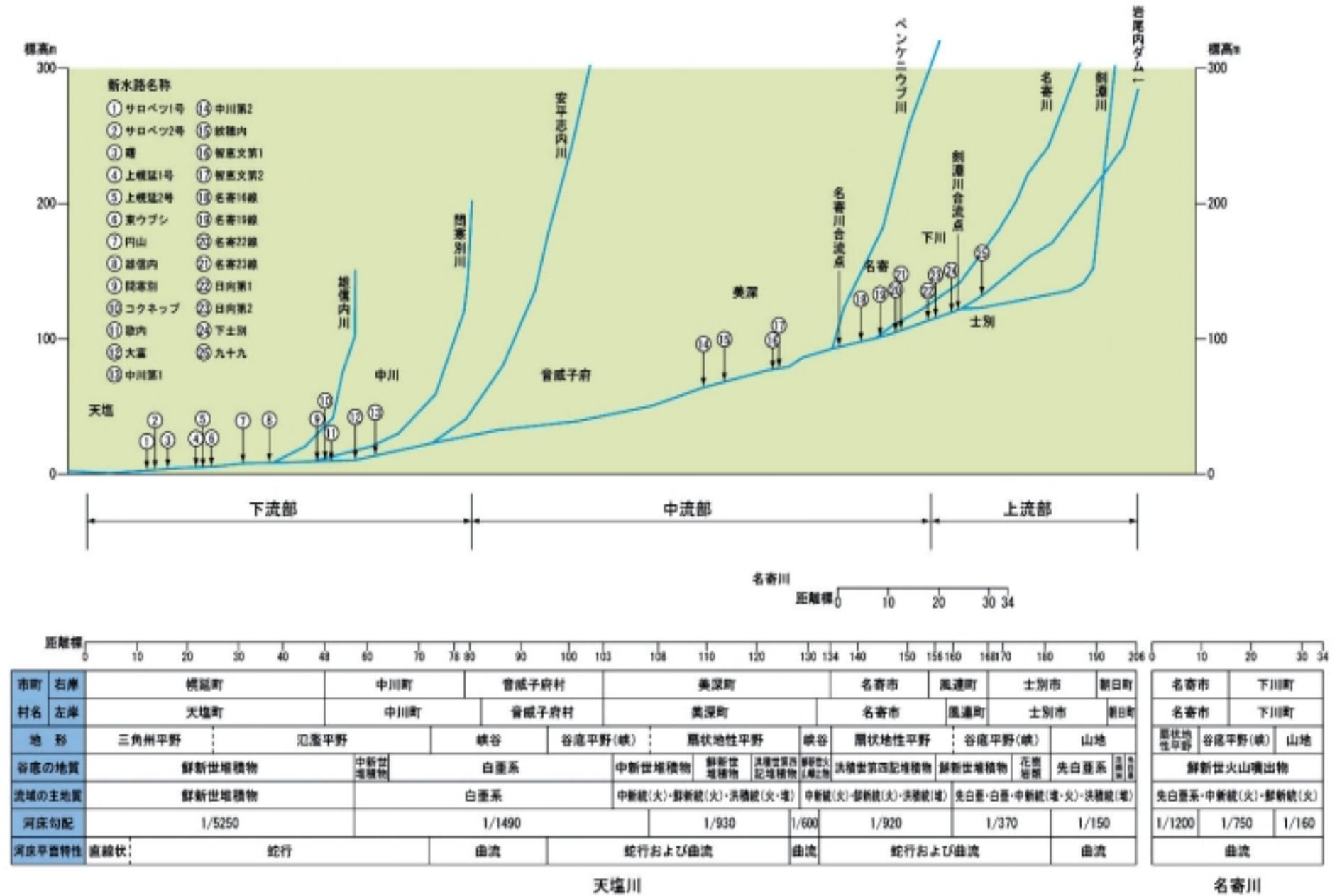


図 - 25 河道特性図